

人と植物とのかかわりを探る(14)

復活祭の白ゆり “ Easter lily ” という英語名をもらったテッポウユリ

誌名	農業および園芸 = Agriculture and horticulture
ISSN	03695247
著者名	松尾,英輔
発行元	養賢堂
巻/号	92巻11号
巻号補足	
掲載ページ	p. 950-958
発行年月	2017年11月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター

Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



人と植物とのかかわりを探る [14]

復活祭の白ゆり“Easter lily”という英語名をもらったテッポウユリ

松尾 英 輔 *

〔キーワード〕: イースター・リリー, 復活祭の花
(イースター・フラワー), マドン
ナ・リリー, バーミュダ・リリー,
日本産ロンギフロラム球根

はじめに

北部九州にあるわが家の庭でも5月末から6月初め頃には、トランペット状の、やや大型ではあるが、白い、清楚な容姿の *Lilium longiflorum* (リリウム・ロンギフロラム) が開花する。優雅で気品のある花であるにもかかわらず、日本では「鉄砲百合 (テッポウユリ)」といういかめしい名前をもらっている。

ゆり研究家として著名な清水基夫氏 (1971) は、「名まえがかわいそうなテッポウユリ」「あの美しいユリとぶっそうな鉄砲とにどんな因果関係があるのでしょうか。よく考えてみるとずいぶん気の毒な名まえだと思います」と表現している。

そのテッポウユリは、欧米、とくにアメリカでは「復活祭の白ゆり」を意味する“Easter lily” (“イースター・リリー”) と呼ばれる。イースター (Easter: キリストの復活祭) は、私たち日本人にはクリスマス (Christmas: キリストの降誕祭) に比べると、なじみがうすいが、欧米ではクリスマスとならんで2大祭日といわれるほど重要な行事であり、テッポウユリは、その復活祭に鉢花として欠かせない花 (写真1) だからである。

この“Easter lily”という英語名が定着したのは20世紀初めから中頃にかけてのこととみられるが、この事実には、日本から輸出されたテッポウユリが関係していることを、読者の皆さんはご存知であろうか。

本稿では、テッポウユリ (本稿では、必要に応じてロンギフロラムとも記す) が、いつ頃、どのようないきさつを経て、復活祭の白ゆり、すなわち“イースター・リリー”という英語の名前を獲得するようになったかを、園芸関係書と大型の英語辞典・センチュリー・ディクショナリー (The Century



写真1 復活祭のときに一般家庭に飾られていたテッポウユリの鉢花
1990年、米国カリフォルニア州ブルッキングスにて。

Dictionary), スタンダード・ディクショナリー・オブ・イングリッシュ・ランゲージ (Standard Dictionary of the English Language), ジ・エンサイクロペディア・アメリカナ (The Encyclopedia Americana), ジ・オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー (The Oxford English Dictionary), ウェブスターズ・イングリッシュ・ディクショナリー (Webster's English Dictionary), ジ・イングリッシュ・ダイアレクト・ディクショナリー (The English Dialect Dictionary), ディクショナリー・オブ・ジ・アメリカン・リージョナル・イングリッシュ (Dictionary of the American Regional English) などを参考に探ってみたので、その概要を紹介してみたい。

1. “イースター・リリー”という 英語の名前に関心をもった理由

テッポウユリの研究を筆者が始めたのは、1970年のことである。いまなお日本と中国との間で話題となっている、東支那海に浮かぶ尖閣列島の魚釣島

で、野生のテッポウユリを採取して持ち帰ったのがきっかけであった。

以来 20 年余、研究材料であるテッポウユリとの付き合いが続いた。この間 1982 年にオランダでテッポウユリ研究の機会を得るまで、テッポウユリを英語では「復活祭の白ゆり」を意味する“Easter lily”（“イースター・リリー”）と呼ぶことにまったく疑問を抱いていなかった。植物・園芸領域では常識となっているからである。また、最近の辞書類をみても、テッポウユリは、ほとんどの英和辞典では“Easter lily”となっているし、英和辞典では「復活祭の白ユリ、とくにテッポウユリ」という趣旨の記述が多い。

ところが、テッポウユリが縁で、オランダで 1 年間の研究生活を送ることになったとき、オランダの研究者が「オランダでは、*L. longiflorum*（テッポウユリ）を“Easter lily”（“イースター・リリー”）とはいわないよ。それはアメリカで使われている名前だ」という。「ではオランダでは、なんという？」と聞き返すと、「*longiflorum*（ロンギフロラム）と呼んでいる。」という答えが返ってきた。

さらに、ヨーロッパの雑誌に投稿した原稿に書いていた“Easter lily”が *L. longiflorum* と書き直されていたことにも驚いた。また、オランダでは復活祭の花としてはアメリカほど重要ではなく、切り花として使われることが多いという話は初耳であった。

日本では、テッポウユリは切り花や花壇用として使われ、鉢物として家に飾ることはほとんどないことを考えると、オランダとアメリカで用途が違ってあたりまえであるし、イースター（復活祭）のような特殊な行事と結びついた名前がオランダで使われないのもうなずける。

オランダ人研究者の指摘をきっかけに、テッポウユリが“イースター・リリー”（復活祭の白ゆり）という、特別の行事と結びついた名前と呼ばれるようになったのはなぜ、いつ頃からか、という疑問を抱くようになった。この疑問を解くために、資料を調べているうちに、次のような概要が明らかになってきた。

もともと復活祭には、その時期に咲く花が飾られていたが、次第にマドンナ・リリー (*L. candidum*) が「復活祭の白ゆり」を意味する「Easter lily, イースター・リリー」の主役を占めるようになった。や

がてそのマドンナ・リリーに代わってテッポウユリが多用され、いつの間にか、テッポウユリが復活祭の花の地位を独占することとなり、“Easter lily”（“イースター・リリー”）という英語名をもらうことになった。

2. テッポウユリ（リリウム・ロンギフロラム）の英語名

一般に植物は方言を含めていくつかの名前をもっていることはよく知られている。植物図鑑などをみても、異名、別名、一名などの形で併記されているものもあれば、一般の辞書には記されていない方言もある。

ではテッポウユリは、“Easter lily”のほか、どのような名前と呼ばれていたのであろうか。英語辞典として著名な大辞典類と園芸関係書を主に参考にして調べた名前は表 1 のとおりであった。

アメリカでも、19 世紀末頃には *L. longiflorum*（リリウム・ロンギフロラム）という記述が散見される（Kean 1890, Pierson 1890, Clucas 1896）が、この頃からさまざまな名前がみられるようになる。

たとえば、産地を示す *Bermuda lily*（バーミューダ・リリー）、*Bermuda Easter lily*（バーミューダ・イースター・リリー）、*Japanese Easter lily*（ジャパニーズ・イースター・リリー）、花の形から名付けられた *Long-tubed white lily*（ロングチューブド・ホワイト・リリー）、*Trumpet lily*（トランペット・リリー）、*White trumpet*（ホワイト・トランペット）、*White trumpet lily*（ホワイト・トランペット・リリー）、*Common trumpet lily*（コモン・トランペット・リリー）、日本の鉄砲百合に由来するとみられる *Gun lily*（ガン・リリー）や *Blunderbuss lily*（ブランダーバス・リリー）、早咲きで花の多いロンギフロラムを *L. harrisi* として紹介した W.K. Harris (Bailey 1901) の名前を示す *Harris's lily*（ハリスズ・リリー）、*Harris lily*（ハリシー・リリー）、*Harrisii lily*（ハリシイ・リリー）、白花という特徴を表現した *Long-tubed white lily*（ロングチューブド・ホワイト・リリー）、*White trumpet*（ホワイト・トランペット）、*White trumpet lily*（ホワイト・トランペット・リリー）、そして復活祭の白ゆりを意味する *Easter lily*（イースター・リリー）、*Bermuda Easter lily*（バーミューダ・イースター・リリー）、*Common Easter lily*（コモン・

表1 テッポウユリ (リリウム・ロンギフロラム, *L. longiflorum*) の英語名のいろいろ

英語名	カタカナ表記	名前の由来	園芸関係資料	大型一般辞書
Bermuda lily	バーミューダ・リリー	産地	Kean 1890	Harris 1909
Bermuda Easter lily	バーミューダ・イースター・リリー	産地・用途	Pierson 1891	Beach 1903
Japanese lily	ジャパニーズ・リリー	産地	Hirota Florist Co. 1905	
Long-tubed White lily	ロングチューブド・ホワイ ト・リリー	形・色	Bailey 1928	
White trumpet	ホワイト・トランペット	色・形	Hayes. 1901	
Trumpet lily	トランペット・リリー	形	Bailey 1928	Gulevich 2002
White trumpet lily	ホワイト・トランペット・ リリー	色・形	Bailey and Bailey 1935	Gove and M-W ed. staff 1961
Common trumpet lily	コモン・トランペット・リ リー	形		Harris 1920
Gun lily	ガン・リリー	形	Grove 1911	Gulevich 2002
Blunderbuss-lily	ブランダーバス・リリー	形	Stearn 1947	Gulevich 2002
Harrisii lily	ハリシイ・リリー	人名	Bailey 1909	
Harris's lily	ハリスズ・リリー	人名		Funk 1913
Harrisi lily	ハリシー・リリー	人名	Seymour 1936	
Easter lily	イースター・リリー	用途	Cook 1900	Harris 1909
Common 'Easter lily'	コモン・イースター・リ リー	用途		Emery and Brewer 1929
Japanese Easter lily	ジャパニーズ・イース ター・リリー	産地・用途	Bailey 1928	

確認した資料のなかで年代の古いものを記した。必ずしも言葉の初出を意味するものではない。

イースター・リリー), Japanese Easter lily (ジャパニーズ・イースター・リリー), True Easter lily (トゥルー・イースター・リリー) などがある。

これらロンギフロラムの英語名は、園芸関係書にまず記載され、一般辞書への記載は少し遅れている傾向がある。また、それらのうち大部分は 19 世紀末から 1920 年代までにみられる (表 1)。そして現在のアメリカでは、オランダの研究者が指摘したように、“イースター・リリー”が一般的になっているし、ロンギフロラム研究者の H.F. Wilkins 教授 (元ミネソタ州立大学) もそう話していた。

このように、比較的短い期間に多くの類似語が出現し、やがて 1 つの言葉に落ち着いて行く現象は、物事の勃興期や流行期に共通して起こることであり、英語の“Horticultural therapy”, 日本語の「園芸療法」にもみられる (松尾 1998, 2005)。

3. 復活祭に使われる花「Easter flower」(「イースター・フラワー」と「Easter lily」(「イースター・リリー」)

日本の主要な年間行事のなかで、お盆のときに墓

前に供える花を「盆花」というが、その花の種類は 1 つではない。原則としてお盆の頃に咲く花のことなので、その花の種類は地域によって異なる。

これと同じように、欧米における復活祭にはその時期に開花するさまざまな花が飾られ、それらが「Easter flower」(「イースター・フラワー」; 復活祭の花), または「Easter lily」(「イースター・リリー」; 復活祭の白ゆり) と呼ばれる。

1898 年のイングリッシュ・ダイアレクト・ディクショナリーでは、両者は区別されていて、「イースター・フラワー」には事例があげられているが、「イースター・リリー」の例は記されず、2 つの資料が紹介されている (Wright 1898)。その後の辞書類 (Harris 1920, Emery and Brewster 1927, Mathews 1951, DARE 1991) では、「春の復活祭の頃に咲く花」という意味の、両者に共通するような、不特定の花が使われることを示す記述はあるが、事例をみると明らかに違いがある。

その違いをより明確に示しているのは、主に「イースター・リリー」の項にみられる「春に開花する (白い) ゆり」という趣旨の記述である (Gove

and Merriam-Webster editorial staff 1961, Stein 1966, Burchfield 1980). すなわち, 「イースター・フラワー」と「イースター・リリー」とはいずれも, 復活祭のときに飾られる花を意味する. しかし, 市民がこれらの言葉でイメージする代表的な花の種類は, すでに 19 世紀末には違うものであったことがわかる.

では, 具体的にどんな花が辞書によく出てくるかをみてみよう.

(1) 「イースター・フラワー」

文字どおり, 復活祭の花として, その頃に咲くいろいろな花のことを意味するという記述もみられる (Mathews 1951; DARE 1991) が, 多くの資料は, 具体的に花の名前をあげている. それらをまとめたのが表 2 である.

これによると, 1863 年に Wood anemone ヤブイチゲ, 1877 年に Daffodil ラッパズイセン, 1891 年に Easter bell イースター・ベル (ステラリア・ホロステア), 1903 年に Poincetia, Pasque of Brazil ポインセチア, 1909 年に Pasque flower ヨウシュオキナグサ, 1968-69 年に Common hepatica ユキワリソウなど, 19 世紀後半から 20 世紀に至るまで, さまざまな花がある. それらの花色をみると, ヤブイチゲとイースター・ベルは白花であるが, そのほかは色花である. このなかにロンギフロラムやマドンナ・リリーを「イースター・フラワー」と記載する例はみられないことが注目される.

(2) 「イースター・リリー」

では, 「イースター・リリー」としてはどんな花があげられているのであろうか.

「イースター・フラワー」に関する記述と同じように, 春早い復活祭の頃に咲く花を意味する記述もある (Harris 1920; Craigie and Hulbert 1940, Mathews 1951, DARE 1991) が, 前述のように, 春に咲くゆり, または春に咲く白いゆりのことを意味するという記述 (Gove and Merriam-Webster editorial staff 1961, Stein 1966; Burchfield 1980) が注目される.

具体的にあげられていた花 (表 3) は, Calla lily カイウ (1877), Daffodil (white lily, Lent lily ともいう) スイセン類 (1882), Atamasco lily アタマスコ・リリー (1894), Spring lily スプリング・リリー (カタクリの仲間) (1897), Madonna lily マドンナ・リリー (1909), Easter lily テッポウユリ (1909), Trillium, wood lily エンレイソウ (1967), Marsh lily マーシュ・リリー (1966-70) である. いずれも〇〇lily という名前か別名をもらっているし, 花色の点では, 橙色のマーシュ・リリーを除けばいずれも白花である点が特徴的である.

以上のように, 復活祭の花を示す言葉として, 「イースター・フラワー」と同じように, 「イースター・リリー」という言葉も 19 世紀後半には使われていた. そして, 復活祭に使われる花のうち, 「イースター・フラワー」は色にこだわらず, 復活祭のときに咲く花をイメージし, 「イースター・リリー」と呼ばれる花は復活祭の頃に咲くゆり (lily) あるいはユリに似た花で, 白花が原則であるとみる

表 2 復活祭の花 Easter flower イースター・フラワーとしてあげられている花

記載年 ^z	学名 ^y	英名 ^y	和名	花色	文献
1863	<i>Anemone nemorosa</i>	Wood anemone	ヤブイチゲ	白	DARE staff 1991
1877	<i>Narcissus pseudonarcissus</i>	Wild daffodil, Lent lily	ラッパズイセン	黄	Craigie and Hulbert 1940
1894	<i>N. poeticus</i>	White lily	クチベニスイセン	白	Craigie and Hulbert 1940
1891	<i>Stellaria holostea</i>	Easter-bell, Great starwort Greater stitchwort	イースター・ベル (ステラリア・ホロステア)	白	Wright 1898
1904	<i>Euphorbia pulcherrima</i>	Pasque of Brazil	ポインセチア	赤	Whitney 1904
1909	<i>Anemone pulsatilla</i>	Pasque flower	ヨウシュオキナグサ	青~紅紫	Harris 1909
1968-69	<i>Anemone hepatica</i>	Common hepatica	ユキワリソウ	淡紅, 青紫, 白	DARE staff 1991

z: 参照した文献に記載されている, もっとも古い記載年を示したものであり, 文献上の初出を意味するものではない.

y: 学名, 古名は変更されているものがあるが, 本表では原則として最近の名前を記した.

表3 復活祭の白ゆり Easter lily イースター・リリーとしてあげられている花

記載年 ^z	学名	英名	和名または	花色	文献
1877	<i>Zantedeschia aethiopica</i>	Calla lily	カラー, オラン ダカイウ	白	Craigie and Hulbert 1940
1882	<i>Narcissus pseudo-narcissus</i> (または <i>Narcissus poeticus</i> ?)	Daffodil, Lent lily White lily	ラッパズイセン クチベニスイセ ン	黄 白	Friend 1882 Craigie and Hulbert 1940
1894	<i>Zephyranthes atamasco</i>	Atamasco lily	アタマスコ・リ リー	白	Craigie and Hulbert 1940
1897	<i>Erythronium albidum</i>	White dogtooth violet Spring lily	カタクリの仲間 スプリング・リ リー	白	DARE staff 1991
1909	<i>Lilium longiflorum</i>	Easter lily	テッポウユリ	白	Harris 1909
1909	<i>Lilium candidum</i>	Madonna lily Annunciation lily	マドンナ・リ リー アナンシエイ ション・リリー	白	Harris 1909, The Times Book Club 1909
1967	<i>Trillium</i> spp.	Trillium, wood lily	エンレイソウ	白ほか	DARE staff 1991
1966-70	<i>Lilium pardalinum</i> subsp. <i>Pitkinense</i>	Marsh lily	マーシュ・リ リー	橙	DARE staff 1991

z: 記載年は調べた資料に示されたなかでもっとも古いもの。

ことができる。

「イースター・リリー」では、なぜこのように、ゆりの、しかも白い花が注目されるのであろうか。

白花のゆりがことのほか重視された背景には、キリスト教では白色は清純・優雅さをイメージする (Gulevich 2002) とともに、春になって芽を出してくることがキリストの再生・復活をイメージするからである (Texas AgriLife Extension Service 2011)。

日本でも井上 (1909) は、もともと伝統的なキリスト教の行事である復活祭には宗教性とかかわる清純・純潔などを象徴する白花が使われてきたが、その代表的な花が地中海地方原産の *L. candidum* (リ・カンディドゥム; マドンナ・リリー) であったと紹介している。

しかも、石井 (1956) によると、ゆりの属名となっている *lilium* はケルト語の“li” (白) と“lium” (花) から成り立っている言葉である。つまり、lily は白い花を意味するという。これに従えば、「イースター・リリー」「Easter lily」の本来の意味は原則的には「復活祭 (イースター) の白い花」ということになる。

とはいえ、英語辞典類では、「白い花をもつユリまたはユリに似た花」を復活祭に使うというとなえ方 (Harris 1909, Gove and Merriam-Webster editorial

staff 1961, Stein 1966) があり、地域によってはこのようなとなえ方がいまなお残っていることが次のような例からもうかがえる。

まず、前述の Wilkins 教授に会ったとき、ロングフロラムを“イースター・リリー”と呼ぶのが一般的であるアメリカでも、南部では、「イースター・リリー」といえば、黄スイセンを連想する地域がある、と話していた。スイセンを「イースター・リリー」と呼ぶ例があることは DARE (1991) にも記されている。

なお、スイセンは Daffodil (ダッファディル) として「イースター・フラワー」にも出てくる (表2) が、「イースター・リリー」の項に出てくる場合には、黄色の *N. pseudo-narcissus* (ナルキスス・シュードナルキスス) ではなく、白花の *N. poeticus* (ナルキスス・ポエティクス) である可能性もある。というのは、前者は Daffodilly (ダッファディリー) または Yellow lily (イエロー・リリー)、後者は White lily (ホワイト・リリー) と呼び分けられている (Britten 1880) ところから、White lily のほうが「イースター・リリー」という名前にふさわしいとも考えられるからである。

さらに、DARE (1991) には、エンレイソウ Wood lily が 1967 年に、橙色のマーシュ・リリーが 1966-70

年に記載されている (Gove and Merriam-Webster editorial staff 1961). また同書には, 1897 年に記載されているカタクリの仲間が 1968-70 年頃に, 1890 年代に記載されているアタマスコ・リリーが 1966-70 年にも「イースター・リリー」として使われていることが紹介されている。なお, エンレイソウについては, 2002 年にもイースター・リリーと呼ばれていることが記されている (Hansen 2010)。

以上のことから, 復活祭にはその頃に咲くいろいろな花が使われているが, 19 世紀末から 20 世紀初めころにはおおむね, 花の色や形にとらわれない「イースター・フラワー」と, ○○lily と呼ばれる白い花の「イースター・リリー」とが使い分けられていたことがうかがえる。しかしながら, 地方によっては, 「イースター・フラワー」は復活祭に使う花, 「イースター・リリー」は復活祭に使うゆりという解釈も今なお生きていることがわかる。

3. マドンナ・リリーに代わって「イースター・リリー」の主役になったロンギフロラム

表 3 に示されるように, 「イースター・リリー」すなわち, 「復活祭の白ゆり」としては, ○○lily と呼ばれる花が多く使われている。時により, 所によりさまざまなゆり (ユリ属植物に似ているところから○○ゆりと呼ばれる植物を含む) が使われたであろうが, そのなかでとくに多く使われ, 市民に親しまれた花が「イースター・リリー」の名前を独り占めにするようになる。

前にも述べたように, もともと純潔と優雅さを象徴する白い花をもち, 春になるとよみがえって芽を出してくる現象をキリストの再生・復活と重ねあわせて, リーガル・リリーが復活祭には使われていた (Texas AgriLife Extension Service 2011)。そのリーガル・リリーに代わってマドンナ・リリーが多く使われるようになったのがいつ頃かについては調べていないので, 明らかではない。

ただ 1 つだけ確かなことは, マドンナ・リリーの開花期は夏なので, 春の復活祭には使うことができなかったと Gulevich (2002) は記しているが, 促成栽培によって復活祭の頃に開花させたマドンナ・リリーを使っていたことが記されている (Bailey 1919, Harris 1920)。つまり, 夏咲きのマドンナ・リリーを復活祭に使うようになったのは, 春の復活祭に使える

ように開花させる促成技術が開発されてから (その年代は明らかではないが) のことである。

いずれにしても, 19 世紀末期頃まで, マドンナ・リリーが復活祭の白ゆり「イースター・リリー」として優位にあったことは, 調べた辞書類の「イースター・リリー」という項に, ロンギフロラムよりも先にマドンナ・リリーを記載した辞典が 5 つに対して, その逆の記載は 2 つであったことからもうかがえる。

そのマドンナ・リリーが「イースター・リリー」の主役をロンギフロラムに譲るようになったのはいつ頃のことであろうか。

ロンギフロラム (テッポウユリ) がアジアからイギリスに導入されたのは 1819 年ごろである (Wilson 1925, Dole and Wilkins 1992)。その後アメリカ本土に近いイギリス領のバーミューダ島で, 容易に促成栽培ができ (Bailey 1901), 復活祭向けの花を商業ベースで (Beach 1903), 安価に生産できるロンギフロラム球根 (石井 1956) が生産されるようになった。

バーミューダにおける球根生産は 1880 年代後期にはブームとなり (Wilson 1925), 1896 年にピークに達し (Dole and Wilkins 1992), マドンナ・リリーに代わって, ロンギフロラムが復活祭の白ゆりとして受け入れられ, 「イースター・リリー」の主役の座を獲得するに至った。

このバーミューダ産のロンギフロラムの普及を反映して, 1890 年前後にその名前に変化が起こってくる。たとえば, Kean (1890) は論文にロンギフロラムとあわせてバーミューダ・リリーと記している。また, 1890 年に種苗広告でロンギフロラムと書いた会社が翌 1891 年にはバーミューダ・イースター・リリーと記している (Pierson)。1896 年には, ロンギフロラムという記述もあれば (Clucas), バーミューダ・イースター・リリーという記述もある (Z. De Forest Ely & Co.)。

1900 年代になると, 園芸関係の雑誌やカタログ類 (Oliver 1903, Boddington's Quality 1905, Hirota Florist Co. 1905, Griffiths 1920, 1921) だけでなく, 園芸関係の辞典類 (Bailey 1901, Nicholson 1901, Hayes 1901, Watson 1908) にも, ロンギフロラムはイースター・リリー, ジャパニーズ・リリー, バーミューダ・リリー, バーミューダ・イースター・リリーなどと記述されている。

一般の大型辞書であるエンサイクロペディア・アメリカナにもすでに1903年(Beach)には、ロンギフロラムはバーミューダ・イースター・リリーと記載されている。その後も、バーミューダ・リリー、イースター・リリー、ハリスズ・リリーなどの名前で出てくる(Harris 1909, The Times Book Club 1909, Funk 1913)。

しかも、表1でみられるように、ロンギフロラムのさまざまな名前は、専門領域で記載されたあと、少し遅れて一般辞書に記載される傾向がある。辞書類には、かなり一般的に使われるようになってきた言葉が採録されるからである。つまり、一般の辞書類に採録されたロンギフロラムの名前が1900年前後から1910年代にかけては一般市民の間でも使われていたことを示唆している。

これらの名前の資料から、バーミューダ産ロンギフロラム球根の普及を受けて、19世紀末にはバーミューダ・リリー、バーミューダ・イースター・リリーという名前が生まれるとともに、ロンギフロラムを「イースター・リリー」と呼ぶことも、20世紀初めにかけて、専門領域から市民の間に浸透していったことがうかがわれる。

いずれにせよ、バーミューダ島での球根生産をきっかけに、「イースター・リリー」の顔となったロンギフロラムの普及ぶりは、市販された復活祭のカードにそれが描かれていることでもわかる。このカードはWilkins教授に見せてもらったものであるが、1918年に発行されたもので、ウサギが曳く荷車にロンギフロラムが積みこまれていた。

ところが、バーミューダの球根生産は、ウイルス汚染によって1925年までに壊滅した(Dole and Wilkins 1992)。これに代わって日本産テッポウユリ球根の輸入が急増し、第二次世界大戦前までアメリカのテッポウユリ市場をほぼ独占するほどであった(Dole and Wilkins 1992)。このようなアメリカにおける輸入テッポウユリの動向を予測する情報はすでに日本でも1911年に農務局農産課が報告している。

実際、アメリカへのゆり類の輸出実績をみると、1902年には400万球であったが、1924年には980万球、1925年には1540万球、1927年1474万球(鈴木1971)と飛躍的に増加している。これらのすべてがテッポウユリというわけではないが、1928年の

輸出検査実績では2996万球のうち実に79%がテッポウユリであること(鈴木1971)を参考にすると、アメリカの復活祭のゆり市場をほぼ制していたことがうかがえる。

なお、20世紀初め頃の、アメリカの「イースター・リリー」の実情を報告した大塚(1927)は、1900年代初め頃にはまだテッポウユリは「Easter lily」の1つに過ぎなかった。当時諸外国で「イースター・リリー」と呼ばれていたゆりとしては、マドンナ・リリー、バーミューダ・イースター・リリー、テッポウユリの3種があったと記している。

しかし、バーミューダ・イースター・リリーと呼ばれた*L. harrisii*は、分類学上はロンギフロラムの一品種として取り扱われることを考えると、復活祭のゆりとしてはロンギフロラムが圧倒的に多かったとみられる。

上に述べたような事情は、すでにバーミューダ産ロンギフロラムの盛況を経て1920年頃までには、テッポウユリは復活祭に欠かせない存在となり、バーミューダ・イースター・リリーあるいはバーミューダ・リリーの名前で圧倒的支持を得ていたことを示唆している。

おわりに

復活祭の花「Easter flower」とは、復活祭に飾る花のことであるが、19世紀中頃には、そのなかでもとくに白色系の花を「Easter lily」(復活祭のゆり、復活祭の白ゆり)と呼んで区別していた。復活祭の白ゆりとしてリーガル・リリーが使われていたが、マドンナ・リリーの促成栽培が行われるようになって、マドンナ・リリーは復活祭のゆりの主役となった。

そのマドンナ・リリーも、19世紀末期になると、その地位はバーミューダ島産のロンギフロラム(バーミューダ・リリーあるいはバーミューダ・イースター・リリーと呼ばれた)にとって代わられた。ロンギフロラムはより容易に促成が可能であり、安価に花を生産できるようになったからである。

バーミューダ島でのロンギフロラム球根生産は1900年代末期にピークに達し、その後はウイルス汚染によって1925年までには衰退してしまった。これを受けて、日本産球根が復活祭(イースター)の促成栽培用として大々的に使われた(Seymour 1936,

Ogilvie 1957, Dole and Wilkins 1992).

このような日本産テッポウユリ球根を、パーミューダ産と区別して、日本産であることを示すために、Japanese lily (ジャパニーズ・リリー) (Hirota Florist Co. 1905), Japanese Easter lily (ジャパニーズ・イースター・リリー) (Bailey 1928) と呼んでいる例もある (表 1)。

しかし、パーミューダ産の球根が病害によって衰退すると、1920 年代後半から日本産球根が大量に使用されるようになった。これにともなう、パーミューダやジャパニーズをあえて名前に入れる必要はなくなり、単に“イースター・リリー”と称されるようになったことが読み取れる。

このように、明治期に始まった、アメリカ向けに輸出される日本産ロンギフロラム球根は、1920 年代後半からいじめるしく増加して、復活祭の白ゆりとして不動の地位を確立し、ロンギフロラムが“イースター・リリー” (“Easter lily”, 復活祭の白ゆり) という名前を獲得することに大きく貢献したとみることができる。

なお、ロンギフロラムが“イースター・リリー” (復活祭の白ゆり) という英語名を獲得したということは、その行事に欠かせない花であることを意味するとともに、それ以外のときには価値のない花になってしまうことをも意味する。実際、促成に失敗して復活祭に間に合わない、ロンギフロラムはただ同然になる、と Wilkins 教授は話していた。まさに「六日の菖蒲 十日の菊」と同じ扱いなのである。

オランダのゆり研究者として著名なファンタイル (van Tuyt) 博士は、ロンギフロラムの需要を伸ばす秘訣は、「復活祭の白ゆり」というイメージを取り除き、日本やオランダと同じように、切り花や花壇用として活用することである、と話していた。

名前はともかく、アメリカにおけるロンギフロラムが、復活祭の白ゆりというイメージを脱却し、切り花、花壇用としてさらに普及し、球根の消費が増え、日本におけるテッポウユリ生産とその輸出が再び活気を取り戻す機会が来ることを期待したい。

謝辞

入手のむずかしい資料を提供してくださった J. van Tuyt 博士 (前オランダ植物育種研究所) と高村武二郎教授 (香川大学農学部)、植物名に関して助

言をくださった土橋 豊教授 (東京農業大学農学部) と P.D. Relf 教授 (元バージニア工科大学) に謝意を表します。

引用文献

- 井上繁雄 1909. イースターとリリーについて. 園芸之友 5 (7): 30-32.
- 石井勇義 1956. ゆり. 園芸大辞典 6: 2477-2505. 誠文堂新光社. 東京.
- 松尾英輔 1998. 園芸療法を探る 癒しと人間らしさを求めて. グリーン情報. 名古屋市.
- 松尾英輔 2005. 社会園芸学のすすめ 環境・教育・福祉・まちづくり. 農文協. 東京.
- 農務局農産課 1911. 百合に就て. 日本園芸会雑誌 220: 24-31.
- 大塚春雄 1927. イースター, リリー. 農業及び園芸 2 (3): 281-284.
- 清水基夫 1971. 日本のユリ. 誠文堂新光社. 東京.
- 鈴木一郎 1971. 日本ユリ根貿易の歴史. (社) 日本球根協会.
- Bailey, L.H. 1901. Easter lily. pp.915-916. *Cyclopedia of American Horticulture*. The Macmillan Co., New York.
- Bailey, L.H. 1909. Lilium. pp.914-923. *Cyclopedia of American Horticulture*. The Macmillan Co., New York.
- Bailey, L.H. 1919. *The Standard Cyclopedia of Horticulture*. The Macmillan Co., new York. p.1865.
- Bailey, L.H. 1928. *The Standard Cyclopedia of Horticulture Vol. II: 1867*. The Macmillan Co. New York.
- Bailey, L.H. and E.Z. Bailey. 1935. *Hortus: A concise dictionary of gardening, general horticulture and cultivated plants in North America*. The Macmillan Co., New York. p.363.
- Beach, F.C. 1903. Lily. In: *The Encyclopedia Americana IX*. The Americana Co., New York and Chicago.
- Boddington's Quality 1905. The hardy Easter lily. *The Garden Magazine Vol.1(1)*: 35.
- Britten, J and R. Holland 1880. *A dictionary of English Plant Names*. Truebner & Co., London. p.305.
- Burchfield, R.W. 1980. A supplement to the Oxford English Dictionary. Vol.1:899. The Clarendon Press, London.
- Clucas, R.R. 1896. Price list of *Lilium harrisii* & *Lilium longiflorum*. Henry G. Gilbert Nursery and Seed Trade Catalog Collection.
- Cook, E.T. 1900. *The Century Book of Gardening - a comprehensive work for every lover of the garden*. Charles Scribner's Sons, New York. p.106.
- Craigie, W.A. and J.R. Hulbert 1940. *A Dictionary of American English on Historical Principles Vol. II*: 858. Oxford Univ. Press, London.
- DARE staff. 1991. *Dictionary of American Regional English II*:260.
- Dole, J.M. and H.F. Wilkins 1992. Present situation and problems of Easter lily in the U.S.A. pp.139-155. In: Proc. 1992 International Lily Symposium in Okinoerabu. Yuri Festa '92 in Okinoerabu Jikkou Iinkai・Kagosimaken Wadamari-chou・Erabuyuri Freesia Seisan Shukka Kumiai, Kagoshima-ken.
- Elworthy, F.T. 1886. Easter lily, Easter rose. pp.225-226. In:

- The West Somerset Word-book: A glossary of dialectal and archaic words and phrases used in the west Somerset and east of Devon. Truebner.
- Emery, H.G. and K.G. Brewster. 1927. The New Century Dictionary of the English Language. The Century Co., New York and London. p.810.
- Emery, H.G. and K.G. Brewster. 1929. The New Century Dictionary of the English Language. The Century Co., New York and London. p.956.
- Friend, H. 1882. A Glossary of Devonshire Plant Names. Truebner. p.22.
- Funk, I.K. 1913. Lily. p.1435. Funk & Wagnalls New Standard Dictionary of English Language. Funk & Wagnalls Co., New York.
- Gove and Merriam-Webster editorial staff 1961. Webster's Third New International Dictionary of the English Language unabridged. Merriam-Webster Inc., Springfield, Mass.
- Griffiths, D. 1920. Home production of Easter lilies. Flor. Exchange 49: 409.
- Griffiths, D. 1921. The production of the Easter lily in northern climates. U.S. Dept. Agr., Washington, Bulletin No.962. (Ogilvie 1957 による) .
- Grove, A. 1911. *L. longiflorum*. pp.93-96. Lilies with eight coloured plates. T.C. & E.C. Jack, London.
- Gulevich, T. 2002. The Easter lily. pp.458-460. Encyclopedia of Easter, Carnival & Lent. Omnigraphics.
- Hansen, W.W. 2010. Wally's trilliums - from our newsletter dated March 2002. Northwest Native Plant Journal 8(2): 19.
- Harris, W.T. 1909. Webster's International Dictionary of the English Language: A supplement of twenty-five thousand words and phrases. G. & C. Merriam Co., Springfield, Mass. Maruzen Kabushiki Kaisha, or Z.P. Maruya & Co., Ltd., Tokyo. Supplement 66p.
- Harris, W.T. 1920. Webster's New International Dictionary of the English Language. G. & C. Merriam Co., Springfield, Mass. p.693.
- Hayes, F.C..1901. A Handy Book of Horticulture: An introduction to the theory and practice of gardening. John Murray, London. pp.150-151.
- Hirota Florist Co. 1905. Japanese and Bermuda lily. The Garden Magazine Vol.1(2): 85.
- Kean, A.L. 1890. The lily disease in Bermuda. Botanical Gazette 15: 8-14.
- Mathews M.M. 1951. A Dictionary of Americanisms on Historical Principles Vol.I: 540. The Univ. of Chicago Press, Chicago.
- Nicholson, G. 1901. The Century Supplement to the Dictionary of Gardening; a practical and scientific encyclopedia of horticulture for gardening and botanists. L. Upcott Gill, London. p.490.
- Ogilvie, L. 1957. Notes on the history of the Easter lily (*Lilium longiflorum*). Royal Horticultural Society Lily Year Book 20: 45-59.
- Oliver, G.W. 1903. The propagation of the Easter lily from seed. U.S.D.A. Bur. Pl. Ind. Bul. 39. (Proc. Amer. Soc. Hort. Sci. 目次による)
- Pierson, F.R. 1890. *Lilium longiflorum*: bulbs ready for delivery early in September. Henry G. Gilbert Nursery and Seed Trade Catalog Collection.
- Pierson, F.R. 1891. Special low price-list for advance orders, given at once, for delivery in summer and autumn, 1891, as soon as bulbs are thoroughly ripened and ready for shipment: *Lilium harrisii*, the Bermuda Easter lily, and other bulbs for winter forcing and spring flowering. Henry G. Gilbert Nursery and Seed Trade Catalog Collection.
- Seymour, E.L.D. 1936. Easter lilies. p.747. The Garden Encyclopedia: A complete, practical and convenient guide to every detail of gardening. W.M.H. Wise, New York.
- Stearn, W.T. 1947. The name *Lilium longiflorum* as used by Houttuyn and Thunberg. Royal Horticultural Society Lily Yearbook 11: 101-108.
- Stein, J. 1966. The Random House Dictionary of the English Language. Random House, Inc., London.
- Texas AgriLife Extension Service 2011. Easter lily. Available online. <http://aggie-horticulture.tamu.edu/archives/parsons/publications/lily.html>
- The Times Book Club. 1909. The Century Dictionary and Cyclopedia ; a work of universal reference in all departments of knowledge with a new atlas of the world Vol.X: 73. The Century Co., New York.
- Watson, W. 1908. The Gardener's Assistant. New edition. The Gresham Publishing Co., London. p.467.
- Whitney, W.D. 1903. The Century Dictionary: An encyclopedic lexicon of the English language. The Times, London. pp.1823-1824.
- Wilson, E.H. 1925. The Lilies of Eastern Asia. Dulau & Company, LTD., London and The Stanford Company, Boston, Mass.
- Wright, J. 1898. The English Dialect Dictionary. Vol.2. Messrs. Simpkin, Marshal, Hamilton, Kent & Co., London. p.231.
- Z. De Forest Ely & Co. 1896. Ely's special bulb price list: *Lilium harrisii*, or true Bermuda Easter lily, hyacinths, narcissus, tulips, etc. for summer and fall delivery. Henry G. Gilbert Nursery and Seed Trade Catalog Collection.